

## 綾部市グンゼの近代製糸産業景観（1868年～1945年）

日本の衣料品ブランドであるグンゼは、1896年に現在の京都府綾部市斑鳩で、製糸業としてスタートしました。当時の日本は新しく生まれた明治時代の政権により推し進められた急速な産業成長と近代化の真っ只中にあり、そして生糸は開国した日本にとって貴重な輸出品だったのです。しかし、当時は日本の絹は品質が非常に悪いと考えられていました。

グンゼの創設者である波多野鶴吉は、周囲の地域をサポートするために養蚕業を改善する必要性を認識していました。波多野は1886年に斑鳩絹産業協会長に任命され、そして高度な養蚕技術を研究するために研修生を派遣し、また養蚕学校を設立したのです。しかし19世紀後半にできた鉄道網により、競合する養蚕地域が有利になり、斑鳩は不利な立場になってしまいます。このため波多野は業界をリードできる絹紡績事業を立ち上げる必要があると判断したのです。

郡是製絲株式会社は、人材と製品の品質の両方を重視する企業理念のもとに設立されました。会社は1897年に女性従業員のための学校を開設し、従業員の教育を行いました。また波多野は事業における信頼の重要性を強調し、繭の評価と購入に関する透明性のあるガイドラインを確立したのです。そして会社設立から4年以内に、郡是製絲株式会社はパリの万国博覧会で金牌を獲得しました。郡是製絲株式会社の教育と製品の品質への取り組みは、独占的な輸出販売契約に同意したアメリカのビジネスマンであるウィリアム・スキナーに感銘を与え、生糸の分野でのグンゼの地位を確立することにつながりました。そして戦前に同社は事業を拡げ、需要の高かったシルクのストッキングの生産を開始しました。最初、郡是製絲株式会社の従業員はわずか220人ほどでしたが、1910年代までには数千人に達し、成長を続けていきました。